桜の国からひまわりの国へ

木野田　博彦（埼玉県　六十代）

私が貴国の名前を知ったのは、小学生の頃クリミアの天使と呼ばれたナイチンゲールの伝記を読んだ時のことでした。更に高校生の時、その哀愁に満ちた映画音楽が大好きで、それにつられ見に行った映画「ひまわり」により、ウクライナという地は、私にとって忘れない場所となりました。

「ひまわり」は映画音楽に勝るとも劣らない素晴らしい映画であるとともに、その映画のロケ地が当時ソ連の支配下に置かれていたウクライナであるということを、映画を見終えて初めて知ったのでした。

ウクライナに広がる広大なひまわり畑、そこには実はたくさんの兵士の遺体が埋められているという悲しい現実と、戦争がもたらす悲劇を綴った美しく悲しい反戦映画でした。

私は貴国が長らく大国からの不当な抑圧、支配と戦い、時に弾圧に屈するも、ついに自由を勝ち取ったという輝かしい歴史を知っています。また貴国が生んだ素晴らしいアスリートたちが、ここ日本の東京、札幌、長野のオリンピックで活躍したことも知っています。

私はそういった素晴らしい貴国の人々、何の罪もない自由を愛する人々が、この二十一世紀の世の中にあっても、尚不当に抑圧されているという現実を、断じて許すことができません。しかし

そう思いながらも何も貴国のためにできないことも事実で、そのことを申し訳なく思っています。

この地球に生まれた誰もが幸せになることを夢に見、誰もが幸せの花を咲かせたいと思っています。蕾みの儘で花咲くことなく消えていくような人生を、誰も望んでいません。貴国の花、ひまわりが一斉に夏の太陽に向かい、生きている幸せと喜びを歌い上げるように花咲かせる日が来ることを、貴国の人々が再び笑顔で手を取り合える日が、一刻も早く訪れるようにと、桜の国日本人の一人として応援するとともに、貴国の平和の実現を心よりお祈りしています。

（特別編　準優秀賞）